

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：32677

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01572

研究課題名(和文) 青少年の性行動・性意識の変化・メカニズムに関する総合的研究と性教育への展開

研究課題名(英文) Comprehensive research on changes and mechanisms of adolescents' sexual behaviors and attitudes and practical application for sex education

研究代表者

林 雄亮 (Hayashi, Yusuke)

武蔵大学・社会学部・教授

研究者番号：30533781

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,600,000円

研究成果の概要(和文)：第1に、図書『「若者の性」白書：第8回青少年の性行動全国調査報告』(2019年・小学館)と『若者の性の現在地：青少年の性行動全国調査と複合的アプローチから考える』(2022年・勁草書房)を刊行した。前者は、第8回青少年の性行動全国調査の基本的な結果をまとめたものである。後者では、その結果を踏まえて、さらに学術的に踏み込んだ議論を展開した。

第2に、2021年に家庭での性教育の実態にかんするインターネット調査を実施し、家庭における性教育の実態と課題を明らかにした。家庭での性教育が必要だと認識されつつも、その実施状況は限定的であり、教育方法や内容に対する親の不安が背後に存在することが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、青少年の性行動・性意識の現代的特徴を記述するとともに、青少年を取り巻く社会環境に焦点を当て、さまざまな角度から性行動・性意識の構造について分析を行った。2000年代以降、青少年の性行動の不活発化が続いており、同時に成人期へ移行しても一度も交際経験のない者が増加していることを踏まえると、少子化や未婚化の一因が青少年期から存在していることが示唆される。さらに近年注目を集めている家庭での性教育については、親の意識の高さが認められる一方で、実際の教育方法や内容にかんしての不安があることが明らかとなった。これらの知見は、学校や家庭における今後の性教育のあり方を見直す上で重要だと言える。

研究成果の概要(英文)：First, the book "White Paper on Youth Sex: The 8th National Survey Report on Youth Sex Behavior" (2019, Shogakukan) and "Current Location of Youth Sex: National Survey of Youth Sex Behavior and Thinking from Integrated Approach" (2022, Keiso Shobo) were published. The former summarizes the preliminary results of the 8th National Survey of Youth Sexual Behavior. In the latter, based on the survey results, we developed academic discussions.

Second, in 2021, we conducted an Internet survey on sex education at home and clarified the actual situation and current issues of sex education at home. Although most parents recognize that sex education at home is necessary, its implementation is limited. It suggests parents' anxieties about the teaching method and its contents of sex education at home.

研究分野：社会学

キーワード：青少年 性行動 セクシュアリティ ジェンダー 社会調査 計量分析 性教育

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

一般に青少年の性が語られるとき、逸脱行動や非行、性感染症への罹患や望まない妊娠、性犯罪や性被害といった解決すべき喫緊の課題や社会問題に焦点が置かれることが多い。実際、社会学、教育学、思春期学、セクシュアリティ研究、ジェンダー研究の分野では、これらについて多くの調査・研究が行われてきた。しかしながら、社会問題化された青少年の性だけでなく、青少年の性の一般的な実態を把握するには、日本社会全体での青少年層への調査と、その結果の継続的解釈が求められる。そのような学術的立場から、「青少年の性行動全国調査」(以下「性行動調査」と略す)が1974年以來ほぼ6年間隔で続けられてきた。

本研究ではこの性行動調査研究プロジェクトを引き継ぎ、本研究の学術的「問い」として、性行動調査の定量データ分析を中核とした青少年の性行動・性意識に関する実態解明を掲げる。さらに、それを基盤とした研究成果の社会還元として性教育への提言を行う。

性行動調査は第7回調査(2011年度実施)までに、全国の中学生、高校生、大学生約10万名の性に関する情報を質問紙調査によって収集し、その研究成果を日本性教育協会編(2001, 2007, 2013)『若者の性』白書』などの刊行物、保健・体育の教科書での引用等を通して社会に発信してきた。また第7回調査以降は、本応募とほぼ同じメンバーで科研費(基盤研究B(22330143)研究代表者・原純輔 2010~2013年度, 基盤研究B(15H03423)研究代表者・石川由香里 2015~2018年度)をベースに調査研究を遂行してきた。第7回調査を中心とした研究成果では、性行動の低年齢化・分極化の様相や、性行動に対する家庭環境の影響、避妊行動の現状と意識、性情報源と正しい性知識との関連等について議論してきた。

2017年度には第8回調査を実施し、2018年8月には基礎集計結果をまとめた調査報告書を刊行した。しかし、青少年の性をめぐる諸問題についての定量的な研究は研究開始当初は未着手であり、社会的にもその研究成果の発信が求められている。

2. 研究の目的

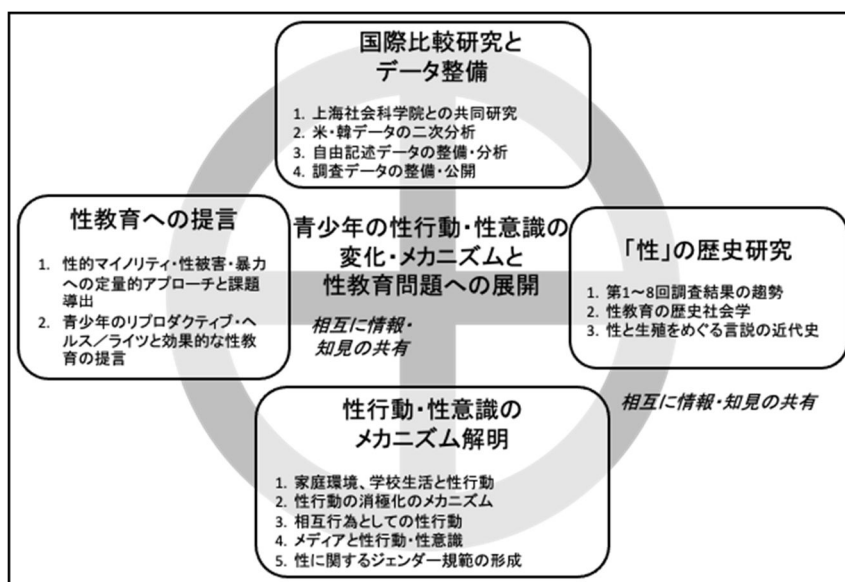
申請時における当初の研究の目的として、下図の4つの主たる内容を提示した。

上に位置するのは、国際比較研究とデータ整備である。ある社会における青少年の性の実態を評価するには相対的な基準が必要である。

従来から日本社会の過去の時点や世代との比較研究を行ってきたが、別の可能性として国際比較研究が挙げられる。国際比較研究は国際社会における相対的位置づけを可能とし、米国のような異文化社会の性行動との相違点への着目や、韓国のような比較的類似した文化的背景を持つ社会との比較研究から有益な知見を得ることができる。さらに、すでに中国上海社会科学院との共同研究(中国における3都市での青少年の性行動調査)も進行中で、国際的な研究業績が期待できる。また各回の性行動調査における重要な情報として、調査票内の最終頁に配置された「性について悩んでいること」の自由記述がある。この定性データを用いて、調査項目には表れてこない青少年の性の特徴を探索的に分析することで、図中の具体的な研究テーマに対して重要な示唆が得られるはずである。性行動調査の各回のデータは、社会還元の一環として研究や教育に広く利用されるよう、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターのSSJデータアーカイブに寄託している。そして本調査データの利用実績も高いことから、第8回調査データもこれまでと同様に寄託するためのデータ整備が必要である。

右に位置するのは、「性」の歴史研究である。この活動では、日本社会の青少年の性行動・性意識に関する長期的トレンドの把握のため、第1~8回調査結果の趨勢分析を実施する。また計量分析に限らず、性教育および性をめぐる各種言説の歴史社会学的な考察によって、性教育の思想と実践の歴史を見直す。

下に位置するのは、性行動・性意識のメカニズムの解明であり、本課題の実証研究の中核をなす活動である。そのため研究テーマも多岐にわたるが、現在、社会において最も注目されている



のは青少年の性行動・性意識の消極化のメカニズムである。第7回調査以降、性行動・性意識の消極化が著しいが、その主たる要因やメカニズムについてはいまだ解明には至っていないため、以下の具体的な研究テーマを設定し総合的な解釈を目指す。

青少年の性行動を促進させたり抑制させたりする要因として、家庭環境や学校生活、メディア接触等が考えられる。家族構造や親子関係が子どもの発達に及ぼす影響のメカニズムを解明しようとする試みは数多く行われてきたが、性行動や性意識については十分な検証が行われていない。なぜならば、性教育についての議論の多くが学校教育における性教育を前提にしてきたことや、そもそも青少年の家族背景的要因と性行動の実態を把握できるような全国規模の社会調査がほぼ存在しなかったからである。

青少年の性行動・性意識は青少年層内部でもタブー視されるため、メディアから受ける影響は極めて強い。特にスマートフォンの普及は、性に関する情報取得の個人化を促進させた。しかし、それが実際の性行動・性意識にどう影響しているかは明らかにされておらず、研究の意義が認められる。また、「おたく」や「腐女子」と呼ばれる二次元の恋愛指向が性行動への消極的態度に繋がることも指摘されているが、メカニズムが不明瞭なことから実証的な研究が必要である。さらに性行動調査では、セクシズムやホモフォビアといった差別的言動と関連する意識も測定しており、これらがメディア利用とどう関わっているかも議論する。

一方で、性意識については、性別役割分業規範への不支持と性的場面におけるイニシアティブを男性に委ねるといふ一見矛盾するようにもとれる意識の関連が、これまでの性行動調査の結果で継続的に認められている。そこでジェンダーとセクシュアリティの形成の相互連関について再検討が必要である。性規範と性行動の関連についてセクシュアリティの受容を軸に考察し、それによっていかにジェンダー秩序が再生産されてきたのかを明らかにする。

また、性行動は言うまでもなく相互行為である。しかし、従来から回答者本人の属性や性行動の動機に着目した研究が中心であり、性行動の相手については研究の蓄積が浅かった。性行動調査では、性行動や避妊のイニシアティブや動機、デートの費用負担、性交相手の属性、デートDVなど相手との関係性についての情報をたずねてきた。これらの情報を体系的に関連付けて分析し、相互行為としての性行動の持つ別様の側面を明らかにする。

左に位置するのは、性教育への展開である。ここでは性行動調査の大規模性を生かし、定量的アプローチにより、青少年層における性的マイノリティ、性暴力・性被害の実態を明らかにする。性的マイノリティの当事者、性暴力・性被害の経験者のみに着目するのではなく、非当事者や未経験者の意識や態度も分析することで、これらの問題への対処方法としての性教育を模索する。また、性行動は性感染症の罹患と望まない妊娠のリスクも伴う。青少年の妊娠・出産は、学業の中断を媒介として生活困難に結びつきやすいことが指摘されている。そこで望まない妊娠や性感染症のリスクの現状と、リスク管理として個々人によって行われている対策(避妊の実行状況等)を定量的に把握し、その問題点を明らかにすることで青少年層のリプロダクティブ・ヘルス/ライツの育成にとってより効果的な性教育を提言する。

### 3. 研究の方法

上記の研究目的の遂行のための具体的な研究方法は、各回の性行動調査の計量的分析が中心である。また、国際比較分析では、次に挙げる調査データの計量的分析が行われた。すなわち、台湾における Taiwan Youth Project (台湾中央研究院が2000年から実施している1980年代半ば生まれの約5,000名を対象としたパネル調査)、韓国における The Korea Youth Risk Behavior Web-based Survey (韓国疾病管理予防センターが2004年から中学・高校生を対象に実施している横断的調査)、中国で2017年に、上海社会科学院により実施された日本の第8回性行動調査と連携した調査である。

先に挙げた調査は新たに実施されたものではなく、既存の調査データの二次分析となっているが、当初の予定にはなかったものとして、次の2つの調査を実施した。

第1に、学校での性教育の実態を把握する必要があるため、2021年度に、学校において外部講師として性教育を担当しているNPO法人のメンバーにインタビュー調査を実施した。

第2に、家庭での性教育の実態を把握するための定量的な調査を、2021年度に、インターネット調査法によって実施した。

### 4. 研究成果

#### (1) 研究の主な成果

研究の主な成果として、2冊の書籍刊行が挙げられる。具体的には第1に、2017年に実施した第8回性行動調査に含まれるさまざまな質問項目についての分析・考察を一般読者向けにまとめた図書『「若者の性」白書—第8回青少年の性行動全国調査報告』(2019年)を刊行した。内容には青少年の性行動の趨勢分析、青少年の性規範・性意識、性行動と家庭環境や親子のかかわり、性に関する知識・態度・行動の観点からみた性教育の現状、青少年の性行動と所属集団の性行動規範、青少年の避妊行動の実態、性的被害、青少年の性についての悩みの分析などが含まれており、さまざまな側面から青少年の性について考察したものである。本書には、第8回性行動調査の基礎集計表や1974年に実施された第1回調査以来の長期時系列データを掲載していることから、一般読者だけでなく、学校関係者、保健・医療関係者、その他の研究者にも重要なデータを提供するものとなっている。

第2に、本研究課題全体の総括として、勁草書房より『若者の性の現在地—青少年の性行動全国調査と複合的アプローチから考える』(2022年)を刊行した。本書は3部構成とし、第1部「若者の性行動・性意識」は、主に数量データを用いて若者の性行動・性意識の実態を把握しようとする実証的研究群である。第1章(林論文)では、これまでの性行動調査にみられる性行動・性意識の趨勢を紹介したうえで、この調査が担ってきた社会的意義と課題を示した。第2章(石川論文)は、性別役割分業意識に焦点を当て、若者が経験するライフコース上のいかなる出来事があるのか、その性別役割分業意識の形成に影響を与えているのかを、計量的に検討した。第3章(苫米地・俣野論文)は、若者の性行動・性意識と家庭環境のかかわりについて分析を展開した。第4章(古村論文)は、性行動のリスクの1つであるデートDVの被害構造を明らかにし、デートDV被害の予防にかかわる性教育との関連についても論じた。第5章(釜野論文)は、性的マイノリティに対し、若者がどのような意識を抱いているのかを、2019年に実施された無作為抽出による全国調査の結果から考察した。

第2部「学校での性教育」の第6章(茂木論文)では、学習指導要領と学習指導要領解説を資料とし、性教育の内容の変遷と現状についての整理を行った。第7章(土田・キム論文)では、学校性教育の外部委託に着目し、その主な依頼先となっているNPO法人のメンバーが、学校性教育をどのように捉えているのか、インタビューデータをもとに分析し、学校性教育の課題の側面を明らかにした。

第3部「若者の性の変容」では、若者の性の変容を歴史的に捉える試みがなされた。第8章(片瀬論文)では、1990年代の高校生女子たちについて、彼女たちを取り上げるマスメディアと、それにとりあげられる自画像を意識しながらコミュニケーションの手段としてパーソナル・メディアを利用する彼女たちの再帰的關係性に焦点を当てた。第9章(羽瀨論文)では、パーソナル・メディアの出現によって、若者の性行動とくに交際相手との出会いにどのような変化が生じたのかを明らかにした。第10章(元森論文)では、もっと長いタイムスパンをとり、未成年者の性がどのように捉えられてきたのかを探る近代史研究として、セクシュアリティ研究が明らかにしてきた「家制度」と「公娼制度」を両輪とする明治以降の性の二重基準と、「子ども」観研究とが重ね合わせることで、「子ども」をめぐる性の輻輳性を浮かび上がらせた。

次に、2021年に実施した家庭での性教育の実態にかんするインターネット調査についての主な成果として、以下の知見が得られた。まず、2~15歳の子どもをもつ8割以上の母親は、義務教育の間に「性交」や「避妊」について子どもたちに学んでもらいたいと考えていることがわかった。また、「性の多様性」については比較的low年齢から学ぶべきだと考えている母親が多かった。それぞれのことからの指導時期については、総じて文科省が想定している時期よりは早く、国際セクシュアリティ教育ガイダンスの設定よりは若干遅い時期での指導を母親たちは望んでいた。特筆すべきは、「性交」も「性の多様性」も学ぶ必要がないと考えている母親は非常に少数派であるということであった。文科省は学習指導要領解説において、性教育を行うにあたって「保護者の理解を得ること」としているが、本調査の結果からは多くの保護者が性教育の重要性をすでに「理解」していることがわかる。このことは学校での性教育を見直すきっかけとして、極めて重要な意義を持っている。

しかし、性教育への理解や関心の高さの一方で、家庭での性教育は十分に実施されているとは言いがたいことも重要な知見であった。特に、母親たちは男子への性教育を苦手としているようであり、学校での性教育の現状と合わせて考えれば、男子に対する性教育の機会のなさの問題と言える。

## (2)得られた成果の国内外における位置付けとインパクト

上記の研究成果については、国内において大きな反響を得ている。『「若者の性」白書—第8回青少年の性行動全国調査報告』(2019年)は、性教育にかかわる多くの人びとにとって貴重な一次資料の提供の場となっており、青少年の性を把握するためのベンチマークとしての機能を持っている。また、調査の結果は中学、高校の保健・体育の教科書などで数多く引用され、研究成果の社会的な還元も果たしている。

研究代表者、研究分担者らは本研究課題にかんして多くの招待公演やメディア取材への対応を行ってきており、得られた成果がいかに社会的関心の高い内容であるかをうかがい知ることができる。

国外への研究成果のインパクトとしては、現在のところ国際学会での企画部会における発表や、中国の上海社会科学院との共同研究によるものがある。

## (3)今後の展望

本研究課題を発展的に継承し、研究代表者らのグループでは、今後の展望として以下の3点について取り組む予定である。第1に、第9回青少年の性行動全国調査の企画・実施を進めていく。第2に、青少年の性を多方面から理解するため、性教育の担い手である学校や家庭を調査対象とし、教育を施す側から青少年の性を考察する。第3に、大学生でない若年層を対象とした性にかんする調査を第9回調査に並行して実施し、日本の青少年層のほぼすべてをカバーする。また、昨今の「若者の草食化」と呼ばれる現象や、未婚化・晩婚化の背景要因を探ることに寄与する。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 加藤秀一	4. 巻 49(12)
2. 論文標題 性・優生学・人類の未来：W・D・ハミルトンの進化思想を読む	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 136-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 保野 美咲	4. 巻 48
2. 論文標題 青少年の避妊行動に及ぼすパートナーとのコミュニケーションの影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会学年報	6. 最初と最後の頁 129～137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11271/tss.48.129	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 石川由香里	4. 巻 23
2. 論文標題 青少年の性行動全国調査	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会と調査	6. 最初と最後の頁 107-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 林雄亮	4. 巻 334
2. 論文標題 青少年の性行動の変化を捉える	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 こころの科学	6. 最初と最後の頁 22-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林雄亮・土田陽子	4. 巻 106
2. 論文標題 家庭での性教育の実態と課題：「2021年全国おうち性教育実態調査」の基礎分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 季刊セクシュアリティ	6. 最初と最後の頁 100-113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤秀一	4. 巻 49(12)
2. 論文標題 性・優生学・人類の未来：W・D・ハミルトンの進化思想を読む	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 136-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林雄亮	4. 巻 334
2. 論文標題 青少年の性行動の変化を捉える	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 こころの科学	6. 最初と最後の頁 22-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林雄亮・土田陽子	4. 巻 106
2. 論文標題 家庭での性教育の実態と課題：「2021年全国おうち性教育実態調査」の基礎分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 季刊セクシュアリティ	6. 最初と最後の頁 100-113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 羽淵一代	4. 巻 10
2. 論文標題 ソーシャルメディアの利用と友人関係満足度 - - コミュニケーションメディアは遠距離にある親密な関係を維持するのか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文社会科学論叢	6. 最初と最後の頁 201-217
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 土田陽子	4. 巻 98
2. 論文標題 中学校における避妊教育と包括的性教育の必要性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊セクシュアリティ	6. 最初と最後の頁 134-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片瀬一男	4. 巻 180
2. 論文標題 機能分化社会における性愛の消滅?	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東北学院大学教養学部論集	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川由香里	4. 巻 676
2. 論文標題 青少年の性行動のリスクを問う	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 青少年問題研究	6. 最初と最後の頁 18-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林雄亮	4. 巻 676
2. 論文標題 全国調査からみた青少年の性行動の現代的特徴	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 青少年問題研究	6. 最初と最後の頁 10-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 針原素子	4. 巻 1
2. 論文標題 性イメージの日中比較	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 青少年の性行動 / 日中比較研究報告書2019	6. 最初と最後の頁 22-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 土田陽子	4. 巻 1
2. 論文標題 避妊行動の日中比較	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 青少年の性行動 / 日中比較研究報告書2019	6. 最初と最後の頁 32-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 羽淵一代	4. 巻 1
2. 論文標題 中国の若者の性行動とその動機	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 青少年の性行動 / 日中比較研究報告書2019	6. 最初と最後の頁 42-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 守如子	4. 巻 1
2. 論文標題 性の情報源の日中比較	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 青少年の性行動 / 日中比較研究報告書2019	6. 最初と最後の頁 50-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計28件 (うち招待講演 14件 / うち国際学会 15件)

1. 発表者名 Eriko Kimura and Ichiyo Habuchi
2. 発表標題 Romantic Behavior of Young People Living in Rural Japan: Network and Trans- Locality
3. 学会等名 IV ISA Forum of Sociology, International Sociological Association (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 片瀬一男
2. 発表標題 純潔のポリティックス
3. 学会等名 第93回日本社会学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 林雄亮
2. 発表標題 2010年代の青少年の性行動 - 00年代の消極化の先にあるもの
3. 学会等名 東京HIVと性の教育セミナー2020 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 片瀬一男
2. 発表標題 「第8回青少年の性行動全国調査」から見えてくるもの
3. 学会等名 リプロネットワーク宮城研修会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石川由香里
2. 発表標題 青少年の性行動と性規範—経験率低下の背景にあるもの
3. 学会等名 『思春期と児童期の成長について』公開シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石川由香里
2. 発表標題 第8回青少年の性行動調査から見えてくる若者像
3. 学会等名 第49回全国性教育研究大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yukari Ishikawa
2. 発表標題 Exploring the Background of the Refusal of Sexual Experience by Japanese Youth
3. 学会等名 The 24th Congress of the World Association for Sexual Health（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yusuke Hayashi
2. 発表標題 How Have Japanese Adolescents' Sexual Behaviors Changed?
3. 学会等名 The 24th Congress of the World Association for Sexual Health (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ichiyo Habuchi
2. 発表標題 Sexual Victimization among Japanese Students
3. 学会等名 The 24th Congress of the World Association for Sexual Health (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yusuke Hayashi
2. 発表標題 Adolescents' Sexual Behavior and Sex Education in Japan
3. 学会等名 The 12th International Convention of Asia Scholars (ICAS12) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Natsuho Tomabechi
2. 発表標題 Family Environment and Sexual Behavior of Youth in Japan
3. 学会等名 The 12th International Convention of Asia Scholars (ICAS12) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yoko Tsuchida
2. 発表標題 The Actual Situation of Sex Education in Japan and the Necessity of Comprehensive Sexuality Education
3. 学会等名 The 12th International Convention of Asia Scholars (ICAS12) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yukari Ishikawa
2. 発表標題 Relationships between Sex Education, Sexual Behaviors, and Gender Norms
3. 学会等名 The 12th International Convention of Asia Scholars (ICAS12) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Misaki Matano
2. 発表標題 Quality of First Sexual Intercourse Experience among Adolescents in Contemporary Japan
3. 学会等名 The 12th International Convention of Asia Scholars (ICAS12) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Misaki Matano
2. 発表標題 The Relationship with Sexual Partners and Contraceptive Use among Japanese Adolescents
3. 学会等名 The 24th Congress of the World Association for Sexual Health (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 羽淵一代
2. 発表標題 「性行動全国調査」結果の趨勢と性的被害の動向
3. 学会等名 青森・性教育研修セミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石川由香里
2. 発表標題 より複雑化し、分極化する青少年の性行動・性意識を理解する
3. 学会等名 第20回九州ブロック性教育研究大会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 土田陽子
2. 発表標題 なぜ性教育は必要なのかー「青少年の性行動全国調査」の結果から考える
3. 学会等名 ウイメンズカウンセリング京都シンポジウム「なぜ性教育は必要なのか考えてみませんか？」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 土田陽子
2. 発表標題 避妊行動の実態と性教育の可能性
3. 学会等名 JASE性教育研修セミナー 2019 in 大阪（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林雄亮
2. 発表標題 性行動・意識の消極化と分極化
3. 学会等名 JASE性教育研修セミナー 2019 in 大阪（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 守如子
2. 発表標題 中国における性行動・性意識の現状と日本との比較
3. 学会等名 JASE性教育研修セミナー 2019 in 大阪（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林雄亮
2. 発表標題 日本の青少年の性行動 全国調査にみる40年間の変化
3. 学会等名 思春期教育と児童の成長に関する国際研究会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 守如子
2. 発表標題 日本における青少年の性的被害の趨勢
3. 学会等名 思春期教育と児童の成長に関する国際研究会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石川由香里
2. 発表標題 青少年の性行動の分極化と性をめぐる若者の規範意識
3. 学会等名 思春期教育と児童の成長に関する国際研究会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林雄亮
2. 発表標題 青少年の性行動の軌跡：1974～2017年－「青少年の性行動全国調査」の結果から
3. 学会等名 第20回性科学セミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 俣野美咲
2. 発表標題 青少年の初交経験の質の変遷と規定要因
3. 学会等名 第67回東北社会学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 林雄亮
2. 発表標題 家庭での性教育の実践状況と課題
3. 学会等名 武蔵社会学会2021年度年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yusuke Hayashi and Misaki Matano
2. 発表標題 Sex Education at Home in Contemporary Japan
3. 学会等名 The 25th Congress of the World Association for Sexual Health (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 片瀬一男・阿部晃士・林雄亮・高橋征仁	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 226
3. 書名 社会統計学アドバンスト	

1. 著者名 片瀬一男・林雄亮・石川由香里・苔米地なつ帆・大倉韻・中澤智恵・守如子・針原素子・土田陽子・俣野美咲・羽淵一代・加藤秀一	4. 発行年 2019年
2. 出版社 小学館	5. 総ページ数 256
3. 書名 「若者の性」白書 第8回 青少年の性行動全国調査報告	

1. 著者名 江原由美子・加藤秀一・左古輝人・三部倫子・須永将史・林原玲洋	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ハーベスト社	5. 総ページ数 252
3. 書名 争点としてのジェンダー：交錯する科学・社会・政治	



1. 著者名 Hidenori Tomita, James E. Katz, Michael Bjorn, Yuichi Kogure, Kota Ito, Tomoyuki Okada, Keita Matsushita, Larissa Hjorth, Ingrid Richardson, Kenichi Fujimoto, Misa Matsuda, Eriko Uematsu, Kyoung-hwa Yonnie Kim, Jason Farman, Kunikazu Amagasa, Ichiyo Habuchi	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 275
3. 書名 Advances in information and Communication Research 3: The Second Offline-Doubling of Time and Place	

1. 著者名 林雄亮・石川由香里・加藤秀一・苫米地なつ帆・俣野美咲・古村健太郎・釜野さおり・茂木輝順・土田陽子・キムハリム・片瀬一男・羽瀨一代・元森絵里子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 若者の性の現在地：青少年の性行動全国調査と複合的アプローチから考える	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<ul style="list-style-type: none"> <li>・「「おうち性教育」どうすれば 子に聞かれたら「怒らず・隠さず」 悩む保護者に自治体が講座」（2022.3.17 朝日新聞）</li> <li>・林雄亮、「家庭での未就学児に対する性教育の実態とは 「2021年全国おうち性教育実態調査」より」『現代性教育研究ジャーナル』、一般財団法人日本児童教育振興財団内日本性教育協会、131、1-5、2022.</li> <li>・林雄亮、「The 12th International Convention of Asia Scholars 京都大会（オンライン）を終えて」『現代性教育研究ジャーナル』、一般財団法人日本児童教育振興財団内日本性教育協会、127、7-9、2021.</li> </ul>
--

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	加藤 秀一  (Kato Shuichi)  (00247149)	明治学院大学・社会学部・教授    (32683)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	片瀬 一男  (Katase Kazuo)  (30161061)	東北学院大学・教養学部・教授    (31302)	
研究分担者	土田 陽子  (Tsuchida Yoko)  (30756440)	帝塚山学院大学・人間科学部・教授    (34423)	
研究分担者	羽瀨 一代  (Habuchi Ichiyo)  (70333474)	弘前大学・人文社会科学部・教授    (11101)	
研究分担者	石川 由香里  (Ishikawa Yukari)  (80280270)	活水女子大学・健康生活学部・教授    (37405)	
研究分担者	苫米地 なつ帆  (Tomabechi Natsuho)  (90782269)	大阪経済大学・情報社会学部・准教授    (34404)	
研究分担者	守 如子  (Mori Naoko)  (70454593)	関西大学・社会学部・教授    (34416)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	俣野 美咲  (Matano Misaki)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	古村 健太郎  (Komura Kentaro)		
研究協力者	茂木 輝順  (Motegi Terunori)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 思春期教育と児童の成長に関する国際研究会	開催年 2019年～2019年
--------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
中国	上海社会科学院			